

るのほな

千葉大学医学部同窓会報 第75号 題字 鈴木五郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

るのほな同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉 (0472) 22-7171 内線2012

新しき酒を！

医学部本館 改築・竣工
移転完了 祝賀会

旧附属病院が医学部本館に生まれ変わり、新しい歩み始めることを記念して、10月25日亥間内広間において頭書の祝賀会が催された。集まるものは文部省、大学本部関係者、名誉教授、るのほな同窓会

員、学内他学部および本学部教職員のほか、友情出演の形で県消防庁の人々を含め三百人を越えた。会

は多田事務長の進行によって始まり、井出医学部長、香月学長、文部省教育施設部を代表して福岡課長、同窓会名誉会長鈴木五郎先生のスピーチが、堀口施設部長の工事経過報告をはさんで、次々と行なわれた。その一部をあげると

「いろいろの過程があったが、基礎・臨床、研究施設が一つの館に集まって出発することになった。このような例は日本中何処にもない。わが千葉大学から出来たのである（井出）。これまでの経過は並大抵のことではなかった。

このような形態を取るに至ったからには、より良い運営を心掛けて、その実を上げて欲しい」（香月）。「前施設部長の矢尾氏と私は共同して、このことに当たって来た。その浅からぬ因縁を思い、このように見事な完成を見たことに心から喜びを申し上げる」（福岡）。「私はこの本館の前身である旧病院が造られる時の事を知っている。比較的小人数の人が、外壁のタイルを一枚一枚丁寧に貼っていた。一見遅々たるようであったが、いつの間にか見事に仕上っていた。何事もたんねんに積上げて行くことが必要である（鈴木）。いずれも万雷の拍手を浴びた。

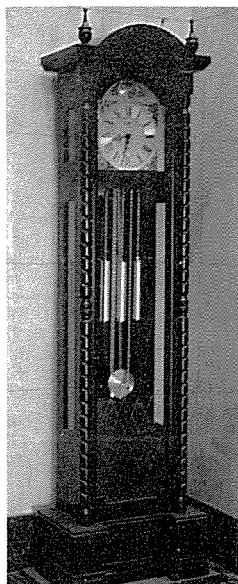
院長代理の渡辺教授の音頭で乾盃した後、全くりラックスした形で祝宴が始まった。伴奏には消防庁の音楽隊、会場周囲の模擬店も、消防庁の隊員達のサービスであり、ムードは上々であった。会場には谷川、川喜田、小林、竹内、寛、北村各名誉教授、矢尾前施設部長、奥野前経理部長、伊藤、山崎、戸村前事務長をはじめ多くのお客様も見え、あいにく足を負傷した小島局長も元気で参加して居り、雨天で寒い戸外に比べて、会場には明るい暖かさがただよっていた。まことに古き皮袋に新しき酒をの癖のように、将来へ向けての第一歩を起す一夕であった。

医学部本館

正面玄関に時計寄贈

昭和26年医学部卒業クラス会は、明年卒業30周年を迎えるが、これを記念して、医学部本館正面入口左側に写真の高さ約二メートルの立派な時計を寄贈した。クラス代表の村

山智教授のお骨折りで実現したものと聞いている。新しい医学部本館の落成と合致し、よいタイミングである。



昭和55年度

秋の叙勲

(敬称略)

勲二等瑞宝章
綿貫重雄（千葉大学名誉教授・国立習志野病院名誉院長・昭和12年卒）
勲三等瑞宝章
佐藤伊吉（千葉大学名誉教授・大正12年医専卒）
勲三等瑞宝章
名尾良憲（元都立病院院長・昭和13年卒）
勲五等瑞宝章
白幡静夫（元安房医師会長・昭和13年卒）

第57回千葉医学会学術大会
第26回千葉県医師会学術大会
第19回日医医学講座

連合大会
開催さる

日時 昭和55年11月22日（土）
場所 医学部附属病院第1講堂
テーマ 超音波診断の実際
循環器領域 稲垣義明教授
消化器領域 大藤正雄講師
産婦人科領域 高見沢裕吉教授
脳神経外科領域

河野守正講師
牧野博安教授

テーマが極めて関心のあるもので例年になく多くの聴衆が集まり、実りある集会であった。

千葉大学医学部



木の香も新しく医学部本館
入口にかかげられた看板
(本学教育学部久米 公助教授書)



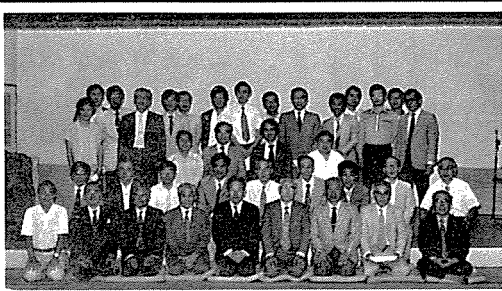
各地るのほな会だより

松戸るのほな会

野本 叔(昭和11年卒)

るのほな会松戸支部の定例の集會は、去る6月21日松戸市の料亭高吉で本部から降矢 震教授をお迎えして開催されました。

先ず会長野本叔の挨拶に始まり、過去一年間の会員の異動の報告がありました。即ち市立病院長西沢重男(昭20卒)の定年退職、新院長丸山卓治(昭22卒)・新副院長遠藤博志(昭32卒)・篠原寛休(昭35群大・大整形外科出身)・新診療局長小幡五郎(昭36)の昇任、内科部長太田重二郎(昭25医専)の松戸市衛生部長転出・前松戸市



医師会長高山直清(昭15)の松戸市健康増進センター所長就任などの紹介がありました。

次いで降矢教授が臨床検査に関する講演を巧みな話術でなされ、貴重な知識を楽しく拝聴致しました。続いて事務局長守岡稔(昭24)の会計報告があり、役員改選を行い、会長中山暢夫(昭21)・副会長丸山卓治・石島福昭(昭29)・事務局長遠藤博志と決定しました。次に副会長森田淳之助(昭21)の司会で市立病院の先生方と開業医との顔合わせの意味で、自己紹介を行い、酒宴たけなわとなり、同窓のよしみで極めて和やかに何時つきるともなく会は続けられました。

さて松戸市は東京のベッドタウンとして年々発展著しく、人口40万人を超える活気溢れる県北の都市でそれだけに松戸るのほな会も80余人の会員を持って、よく相合して強力な同窓の結合となっています。従って本会は千大出身の市立病院の先生と開業医の先生との懇親会という大きな意味があります。市立病院は新装なって四八五床を有し、60名の医師を擁し、医療内容の充実した県北の大病院に成長し、松戸市医師会の最終受入病院で、開業医にとっては特に御世話になっている現状です。市立病院の幹部の先生はさきに紹介しましたが、本会で一番の先輩は篠田静雄・坂本健次郎・高橋一(昭三)先生で何れも昭和9年卒業の同級生です。以上今回開催されたるのほな会松戸支部の例会の模様と現況をご報告申し上げます。(敬称略)

静岡るのほな会

中村 武(昭和20年卒)

静岡支部は浜松医科大学ができて千葉大出身の教授が赴任して以来今迄にも増して同窓生も増え、大塚三八雄支部長(昭6卒)の下に纏りもよく、且つ楽しい集りとして他大出身者から羨望の眼差しで見られている。

総勢二八〇名となり、静岡支部、清水支部、沼津支部など地区毎の支部に分れて、夫々のグループの定期的な集りを持って親睦の実を



あげ、お互いに助け合いながら活躍している。そして地域に密着した医療を以って奉仕し信頼された人間関係の下に各会員悠々と生活している。東海メカロボリスの環境として毎日富士が眺められる風光明媚な土地柄、病院勤務から開業というケースが多く、従って沼津市を中心とした一區画、清水市を中心とした一區画に会員が集中しており、これから一〇年位経つと浜松市を中心とした一大勢力ができることが予想される。

各地区の集りは屢々あるが、静岡るのほな会総会は二カ年に一回ということで、本年の八月九日、千葉大るのほな会本部から萩原教授並びに新任の奥井教授の御来臨を仰いで静岡市で開催された。総会に先立って県医師会館講堂で行われた講演会は一般公開という形で行われ、高名な二教授の啓蒙的な講演のため講堂に溢れん許りの盛会であった。

整形外科の井上教授には「脊椎外科における最近のトピックス」東大血清学の多田教授には「最近の免疫学の問題点、ことに疾患理解のための課題」と題する解り易い、しかも高度な医学的解説をしていただいた。

引続いて行われた総会には七五名が出席し、記念写真を撮ったあと、新旧相交えて、和気藹々の中に旧交を温め愉快な一宵を過ぎ、次回は東部で開催することを決定して散会した。

銚子るのほな会

片倉 透(昭和42年卒)

十年程中断していた銚子るのほな会、近年再開の気運が盛りあがり、昨年四月はほぼ全員出席という盛会で次回を期しました。

本年は、10月18日松本胖名教授・本間三郎教授をお招きし、第二回を料亭八潮で開催しました。特に本間先生には、新潟の学会から直行という強行軍で大変御迷惑をかけました。

先ず両先生より、大学の現状・現代の学生気質といったお話、また中国との交流等いろいろ承った後、杯を交しながらゴルフ・釣その他もろもろの話題が和気藹々のうち語られ、約三時間の宴会があつた。つまらぬ話もあつた。幹事の不幸で行事の多い月を選んでしまい、両先生をはじめ、会員諸兄には大変御迷惑をかけた。今回は大学よりの先生方には、もっとゆとりを頂きたい。銚子の観光も兼ね、おくつろぎ願える季節も選ぼうにしたいと思えます。最後に千葉大るのほな会本部の御厚意に深謝致します。

武野良仁氏・藤沢武彦氏

成人病研究助成金贈呈さる

武野良仁氏(昭和38年卒・日産厚生会玉川病院外科部長)・藤沢武彦氏(昭和42年卒・肺外科)には、このたび三井生命厚生事業団より成人病研究助成金一〇〇万円

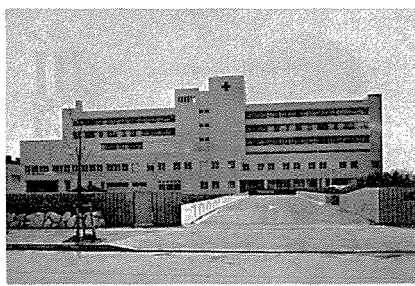


当日の出席者は次の通りです。(敬称略) 前列左より、金子重夫(昭20卒)・本間三郎教授・松本胖名教授・浦部嘉夫(昭17卒)・山口広雄(昭26卒)・西原銚子医師会副会長(金沢大卒)・第二列左より、小林靖典(昭35卒)・江畑耕作(昭25卒)・加瀬貞治(昭26卒)・後列左より、片倉透(昭42卒)・渡辺汎治(昭44卒)・鈴木玄強(昭26卒)・野口晃平(昭29卒)・宮内鎌二郎(昭25卒)・中川利男(昭42卒)。

贈呈された。研究主題は「自然気胸の成因・治療・予防に関する研究」に対してである。

深谷赤十字病院だより

院長 高 木 紹 夫 (昭和23年卒)



昭和25年に日赤中央病院より二カ月の予定で出張を命ぜられ、11月1日、内科・外科・放射線科・病棟60床で発足して、今年で満30年になる。常勤医なのに時間外手当・ボーナスもない生活が五年余り、漸次土地も購入、病床数も増し、現在の新病院新築前には、193床の病院となった。開拓期にはオートバイも自動車も個人のものを使用していたが、実質的に院長生活を経て昭和45年小生が院長となった。純然たる独立採算制のため、赤十字の院長は、非常に苦労の多いものである。自己資金二百萬円で現病院を完成した苦労はいずれ語るときもあると思うが、現在診療科目は、内科・消化器外科・小児科・小児外科・整形外科・脳神経外科・皮膚科・泌尿器科・産婦人科・眼科・耳鼻咽喉科・麻

酔科・放射線科・神経内科で伝染病棟を含めると338床である(敷地面積七六〇〇坪、建物面積四〇〇〇坪)。現在ベッド利用率92%、外科・内科の病床不足は著明であり、本年外来平均は780名、多い時は一〇〇〇名を越し、400台分の駐車場は全く不足している。手術件数は本年七・八・九の三月で340件となっている。職員数350名・医師常勤49名・看護部員185名・薬剤師10名・臨床検査16名・放射線技師10名等である(なお、なのはな同窓会員は10名)。

昨年創立30周年記念に約260坪の体育館の起工式を行ったが、目下看護婦宿舎の一階に併設してある院内保育所の拡大と、それに隣接して特別老人養護ホームの設立を計画中であり、第三次救急医療を主体に、リニアク・CT・T・Fホルボデー・三室の感染予防室・新たにCCU・ICU・高圧酸素室等を含んだ150・200床の新増築の設計をすすめている。目標は深谷医療圏の中心としての病院の完成であり、同時に将来教育病院として成長させる予定である。

院長としての希望は、開設時職員11名から本日迄、異常な努力をしてきたものであり、昭和29年から白壁先生或は市川君等多数の千葉の先輩・後輩諸氏に指導を受けて来たものであり、各科共千葉大学にその意志さえあれば、卒業生

で占められていたと思うのだが、現在は全く群馬大学寄りである。小生としては、何処の大学の卒業生も五十歩、百歩と考えているので、良い医療を考えていけば良いのであるが、必ずしも母校愛等持っている人間ではないが、たまたま千葉出身であるし、医療界の現実を考えると、これだけの病院と

中山恒明先生古稀の祝

中山メデイカルクラブ
福島 通 夫 (昭和29年卒)



中山前第2外科教授は、明治43年(一九一〇年)9月25日生れで本年目出たく満70才となられた。神田小学校時代は腺病質で出欠常ならずだったのが、新潟高専陸上部における鍛錬が実って今日まで健康に過ごして来られた。昭和22年より39年まで千葉大学第2外科教授時代、昭和40年より51年までの東京女子医大消化器病センター所長時代を通じてその活躍ぶりは衆知の通りであり、今なお同センター名誉所長として内に外に昔に変わらぬ多忙な毎日である。

将来性を後輩に残さぬことは惜しい気がする。積極的後援或はこれから誕生する後輩諸君のためにフィールドの開拓に努力して頂けたらと思っている。ちなみに群馬大学から数名の教授が定期的に来ておられるし、埼玉大学も乞はずに教授が訪ねて来られたことも付記しておく。

中山前第2外科教授は、明治43年(一九一〇年)9月25日生れで本年目出たく満70才となられた。神田小学校時代は腺病質で出欠常ならずだったのが、新潟高専陸上部における鍛錬が実って今日まで健康に過ごして来られた。昭和22年より39年まで千葉大学第2外科教授時代、昭和40年より51年までの東京女子医大消化器病センター所長時代を通じてその活躍ぶりは衆知の通りであり、今なお同センター名誉所長として内に外に昔に変わらぬ多忙な毎日である。

書 評

ナースと患者の対話

宇 治 正 美 著 (昭和16年卒)

長野県立阿南病院院長宇治正美氏は、病院長の職務のかたわら「ナースと患者との対話」なる二六九頁からなる本を出版した。著者は、故石川憲夫名誉教授に師事し、三輪清三名誉教授を兄弟子とし、三輪先生を「ねんごろ先生」と著書の中で紹介し、同氏はこの両先生に影響されている所が多いと、敬服している。

現在看護専門職となっている

別門下生ならびに現各大学スタッフの紹介で教育の成果が示された後、君達が先に死ぬと会えなくなるとの今の中に顔を見ておこうと思ひ集まってもらったという先生

村山 智 薬理学教授

開講十周年記念講演会開催

村山智教授には教授就任十周年にあたり、去る11月29日(土)第三回薬理研修会を兼ね記念講演会を医学部第二講義室において、開催した。講義内容は左記の通りであり、

「脊髄をめぐる薬理」私の歩みつゝある道」村山智教授

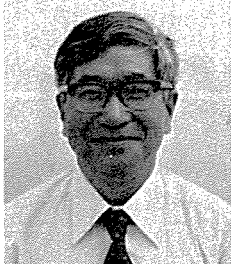
特別講演

「脳内モルヒネ様物質と疼痛制御」京都大学薬学部薬理教室 佐藤公道助教授

講演会の終了後、新港のニューパークホテルにて、懇親会を開催したが、小林竜男名誉教授はじめ多くの同門・来賓50名程集い、過去十年の労苦をねぎらい、これから十数年の同教授のご活躍を期待して午後九時近く散会した。

川崎病発見のいきさつ

川崎 富作 (昭和23年医専卒)



川崎病発見のいきさつを述べようという依頼ですが発見などという大それたものでないことを、この小文は物語っていると思います。さて、私共臨床家の日常は診察した患者の診断と治療に尽きると思っています。正しい診断がすぐつく場合は問題も少ないのですが、診断のつかないときが一番苦勞致します。

昭和36年1月、たまたま4才3カ月の高熱持続、頸部リンパ節腫脹、全身の発疹、眼球結膜の充血、口唇口腔内粘膜の充血、掌蹼紅斑などを伴った今までに経験したことのない男児例を受持しました。この症例は黄疸を伴い、一過性に高度の貧血がおこりましたので、クームステストを行いましたところ、直接クームス陽性の結果を得ました。そこでこの変わった症状は自己免疫性の何かによるのではなからうかと勝手な想像をしました。下熱後、この患児の指先から膜様の落屑がはじまったのも、大変印象的でした。何故なら、これは猩

紅熱の落屑と全くよく似ていたからです。しかし、勿論、発疹は猩紅熱様ではなく、咽頭からも溶連菌は証明できず、ペニシリンも無効で、猩紅熱は確実に否定できました。では一体診断は何かとなりました。全く見当が付きません。結局、診断不明のまま退院させざるを得なかったわけです。この症例の印象は強烈で、私の脳裏に強く焼き付けられました。昭和36年はこの症例のみでしたが、翌昭和37年に予期せざるものが起こりました。たまたま、当直の夜、都内の某病院から、敗血症と考えられる症例だが、ベッドがないから引取って欲しいという依頼を受けました。この患者を診て吃驚しました。将に一年前、診断のつかなかったあの例にそっくりではありませんか。早速、入院させ、観察しましたところ、全くよく似た経過をとりました。ただ、黄疸はなくクームス試験は陰性でした。この2例目を経験して、このような尋常ならざる症状を呈する疾患が存在するという実感が湧いてきました。幸いにも、その後、次々と同様の症例を受持つ幸運に恵まれ、昭和37年10月第61回日本小児科学会千葉地方会に、「非猩紅熱性落屑症候群について」と題して本症の7例を報告しましたが、誰れも注目してくれませんでした。

その後、毎年5〜10例と経験を重ね、6年間に50例という少なからざる症例を経験することができましたので、昭和42年に「アレ르기」誌に、指趾の特異的落屑を伴う小児の急性熱性皮膚粘膜淋巴腺症候群―自験50例の臨床的観察―と題して発表しましたところ、北は北海道から南は九州まで、各地の小児科医から、このような症例を経験したという私信が届き、自分達だけの経験ではないことを強く認識させられました。かくて、各地の小児科学会地方会で、この問題が取り上げられるようになり、医学雑誌にも追加報告例が次第に増加してきましたので、昭和45年度より、厚生省の医療研究助成補助金を得て、本格的な本症の総合研究が開始されました。

はじめ、本症は予後良好と考えられていましたが、第一回の全国実態調査の結果、一部に突然死することがあり、かつ、剖検例はすべて冠状動脈に血栓閉塞のあることが判明し、従来から欧米で稀れに報告されてきた、乳児型結節性動脈周囲炎と病理組織学的に区別がつかないユニークな像を呈する疾患であることが証明され、俄然、内外の注目を浴びるようになりました。一九七四年、本症に関する英文の論文を、公衆衛生検査学部の重松逸先生達と共同発表しましたところ、全世界からおびただしい別刷請求があり、関心の深さが想像されました。かくて、一九七九年のネルソンの小児科書にも本症の項目が加えられるようになり、名実共に世界に認めら

れたわけでありました。自分の名の冠された疾患が外国の教科書に載るといふことは一臨床家として、これ以上の光榮はないと感激しております。それもこれも、戦中、戦後の極めて困難な時期に、このものはな台で学ばせて戴いたお蔭であり、よき恩師、先輩、同僚に恵まれた結果であると存じます。その後、東京の、しかも伝統のある由緒深き病院に勤務させて戴き、ここでも、よき師、よき同僚にめぐまれ、日常のいそがしい診療の中で、このような仕事をさせてもらえたことは誠に幸運の一語に尽きると存じます。

訃報

○内田佐造氏 (昭和55年9月24日逝去) 先生は昭和7年本学卒業後小児科に入局され、昭和16年小児科講師となられた。その後豊橋市民病院副院長、多摩相互病院理事として活躍された。またご存知のごとく、ろはな同窓会においては長く常任理事を務められた。
○戸賀崎義泉氏 (大正6年卒・55・1・22死亡)
○荻島辰之助氏 (大正7年卒・55・2・22死亡)
○篠塚正二氏 (昭和9年卒・55・3・2死亡)
○松沢義之氏 (昭和29年卒・55・3・16死亡)
○田中汎実氏 (昭和33年卒・55・3・17死亡)
○市川順道氏 (昭和15年卒・55・3・20死亡)
○鈴木秀夫氏 (昭和17年医専卒・

55・3・26死亡)
○泉川民治氏 (昭和5年卒・55・3・6死亡)
○神原維摩士氏 (昭和27年卒・55・3・23死亡)
○児玉勝利氏 (昭和5年卒・55・5・4死亡)
○関野伊佐氏 (昭和30年卒・55・5・24死亡)
○岩田勝吾氏 (昭和11年卒・55・2死亡)
○横田恒雄氏 (大正6年卒・55・6死亡)
○安富哲三氏 (明治42年卒・55・2・19死亡)
○関隆氏 (昭和24年卒・55・7死亡)
○根橋三郎氏 (大正6年卒・55・7・24死亡)
○中山立三氏 (大正9年卒・55・7・10死亡)
○荒木智夫氏 (昭和2年卒・55・7・15死亡)
○小川忠雄氏 (昭和8年卒・55・8・13死亡)
○荒岡弘氏 (昭和23年医専卒・55・9・6死亡)
○粕川堅次氏 (大正10年卒・55・6死亡)
○木部佳紀氏 (昭和7年卒・55・6・13死亡)
○堤丈夫氏 (大正14年卒・55・7・30死亡)
○河本純一氏 (昭和20年卒・55・8・15死亡)
○山浦栄女氏 (大正8年卒・55・9・1死亡)
○篠原規休氏 (昭和3年卒・55・10・19死亡)

○昭和55年暮近くなり、75号の同窓会報をお送りします。この秋も多くの学会・学術集などありまたたくまに師走となり、一九八一年を迎えようとしております。同窓会員が年後半に主催した学術集会は、術後代謝研究会(伊藤健次郎前教授・千葉市)・日本気管食道学会(佐藤博教授・千葉市)・国際肝臓病学会(奥田邦雄教授・シカゴ)・日本公衆衛生学会(柳沢利喜雄名誉教授・千葉市)などで、いずれも盛会でした。
○この夏には東医体が千葉大学が主管校で開催し、多くの先輩各位のご協力を得て、これもつがなと終了しました。成績はもう一歩という感はありませんが、編集部からもお礼申し上げます。その結果報告が学生諸君の手によって出来ましたので同封させて頂きます。
○医学部本館の改修工事・引越しも終り、基礎・臨床・研究施設が一つの館で仕事をすることになりお互いの交流も密になり、研究成果がさらに向上されることと思われ、先輩諸兄千葉にお出の節には思い出のあるものはな台に足を運び下さい。
○学術会議員選挙の結果が発表になり、本学から立候補の本間三郎教授・金沢大学黒田恭一教授・新潟大学渡辺巖一教授いずれも当選しました。会員諸兄の絶大なご支援に厚くお礼申し上げます。よい年をお迎え下さい。(奥井勝二)

編集後記